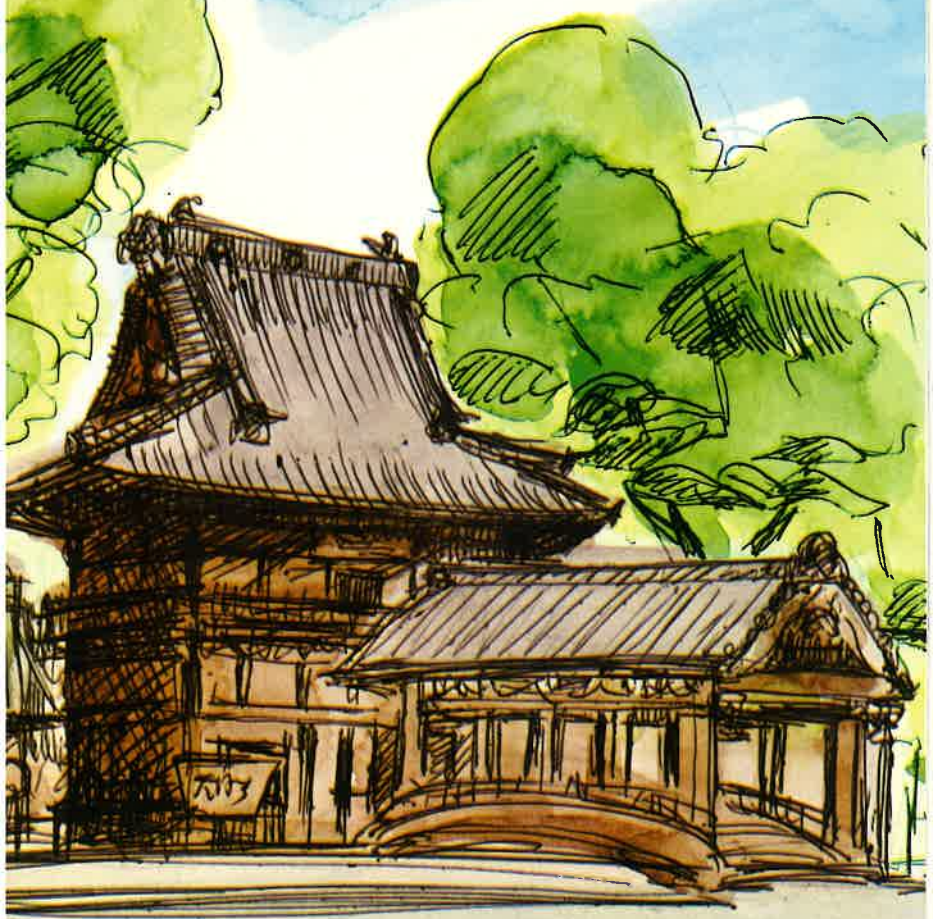
足利の伝説

台　一雄著



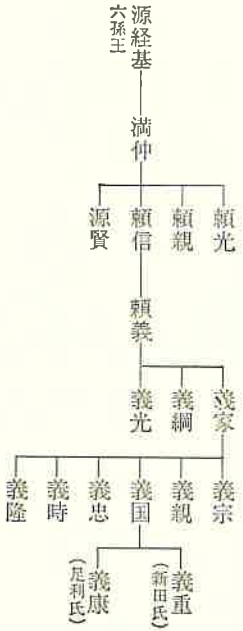
足利の伝説

台　一雄著

岩下書店

風習は、今も残っていて、本殿の左側にこれを納める約五平方メートルの杓堂が建てられ、中に底の抜けた柄杓がたくさん納められています。

癪と杓をもじり、癪が抜けた（直った）にひっかけて柄杓の底を抜いて奉納する――これはいつごろ、だれが考案したのか知りませんが、まったくうまくこじつけたものと感心させられます。



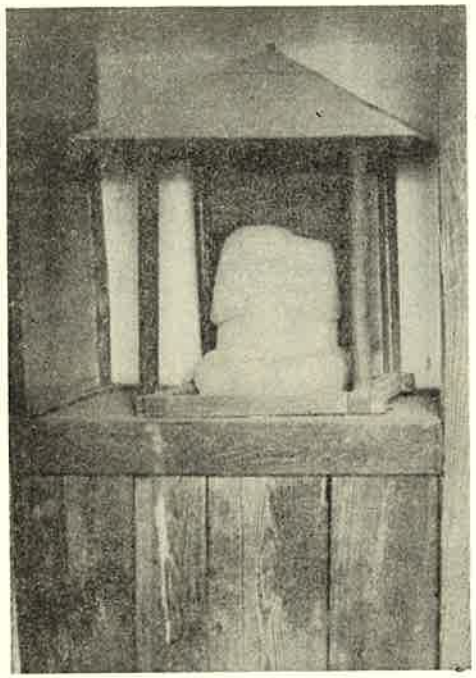
第十話　お化け地蔵

――竹光で首をスパリッ――

（五十部町）

五十部東山の、山すその道を北に行くと、右手に地蔵堂があります。

お堂の右前に大きな松の木があり、左側に苔むした感じの石像が並んでいるので、すぐわかります。堂内には三体の像がありますが、向かって左端にまつられているのが本篇の主人公で、土地の人から「お化け地蔵」とか「首なし地蔵」と呼ばれて



お化け地蔵

います。

昔、大岩村（今の大岩町）に、小林平内という武士が住んでいました。

ある夜、急病のため医者を呼んでくるように仲間に命じました。ところが、医者の家に行く途中の道ばたに石のお地蔵さまがまつられていて、夜ここを通ると、お地蔵さまが抱きついたり、いろいろの〝たたり〟があるといわれていたので、仲間がこわがって腰をあげません。

一計を案じた平内は、

「我が家に、家宝として先祖から伝わっている正宗の名刀があるから貸してやる。この正宗を持っていれば、バケモノの方が恐れて出てこない。心配せずと早く呼んできてくれ」

と、むりやりに説きふせ、

「これが正宗だ。大切に持って行け」

そういって竹光を持たせました。

竹光というのは、刀身を竹で作ったもので、本当の刀ではありませんから、物を斬ることはできません。

そんなこととは知らない仲間は、

「この刀さえ持っていればだいじょうぶ」

と竹光を両手で抱くようにして、医者の家に急ぎました。

やがてお地蔵さまのところまでくると、

「おーい、おぶっていけ」

と無気味な声をかけられました。

「ウワッー」

仲間は持っていた刀を抜くなり夢中で斬りつけますと、お地蔵さまの首がポロリッと落ちました。あとも見ずに医者の家に駆けこみ、帰りは近所の若者大ぜいで、医者を囲むようにして通りましたが、こんどは何事もありませんでした。

医者の手当てが早かったためか、平内は間もなく全快しました。その後しばらくして、仲間を呼んだ平内は、

「だましたようで悪かったが、あのときお前に貸したのは竹光だった。きょうは本物を見せてやろう」

そういって、奥の間からうやうやしく正宗を取り出してくると、作法に従って抜き放ちました。瞬間、平内の顔色がサッと変わりましたが、それも道理。家宝として何よりも大切にしていた名刀の刃がボロボロにこぼれているではありませ

地蔵堂

んか。
「ウーン」
とうなったきり、あとは驚きと恐れに、しばらくは口もきけませんでした。
このお地蔵さまが、いつごろから堂内にまつられるようになったのかはわかりませんが、毎年八月二十四日がお祭りで、今でも、たいへんにぎわっているといいます。

第十一話　片根の榎

——足利七不思議の一つ——

（伊勢町）

大町の善徳寺は、開基が足利尊氏、開山が仏満禅師と伝えられています。

尊氏は、鑁阿寺の開基である義兼から七代目の源姓足利氏の直系で、室町幕府の初代将軍ですから、たいていの方がご存じだと思います。

仏満禅師は、鎌倉円覚寺の開山、仏光国師四世の法孫ですが、足利氏の血流を汲んでいる人でもあります。（末尾の系図参照）

このお寺の前の通りを、昔は折戸といいましたが、その南側、現在の藤五ストアの横の方に、足利七不思議の一つにあげられている「片根の榎」があったのをご存じでしょうか。

胴切りにされた片根の榎